

ヘンリー 2 世とトマス = ベケット

Henry II and Thomas Becket

川 瀬 進

目 次

- I はじめに
- II 王位継承
- III アリエノール = ダキテーヌ
- IV トマス = ベケット
- V おわりに

I はじめに

1154年12月19日、アンジュー伯アンリ = プランタジネット (Henry Plantagenet, Count de Anjou, 1133.3.25-1189.7.6)¹⁾ が、イングランド王ヘンリー 2 世 (Henry II, Curtmantle, 在位 1154-1189) に即位したとき、イングランドは、ステイーヴン王の失策 (misgovernment) により、無政府状態

1) アンジュー伯アンリ = プランタジネットのプランタジネットというのは、1154年から1399年までのイングランド王家の治世を指す言葉である。すなわち、ヘンリー 2 世 (Henry II, Curtmantle, 1154-1189) からリチャード 2 世 (Richard II, 1377-1399) までである。このプランタジネットという言葉の由来は、ヘンリー 2 世の父アンジュー伯ジョフロワ (Geoffroi, Count de Anjou, 1113.7.24-1151.9.7, 在位 1129-1151) が、好んで、黄色の花が咲くエニシダの枝 (ラテン語: *Planta genista*, プランタ = ジェニスタ) の小枝をバッジ・家紋として、帽子に付けていたからである。この言葉は、15世紀中ごろまで一般的に使用されていなかった。一般的に使用され出したのは、1450年代、ヨーク公リチャード 3 世 (Richard III, 1483-1485) からである。リチャード 3 世は、ヨーク家のライバル家・ランカスター家のヘンリー 6 世 (Henry VI, 1422-1461, 1470-1471) よりも、上位に王位継承権があると主張することにより、このプランタジネットという言葉を使用した。だが、広い意味では、アンジュー家をはじめ、ランカスター家、ヨーク家も、すべてプランタジネット王家である。Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1990, ed. A Dorling Kindersley Book, 1993, p. 37.

(anarchy) に陥り、国内は、混乱していた²⁾。

この無政府状態の原因は、前イングランド王、ブロアのスティーヴン (Stephen de Blois, c. 1096-1154.10.25, 在位 1135-1154) の性格が、柔弱であったことに尽きる。

例えば、ブロアのスティーヴン王の性格が、柔弱であるが故に、後の王位継承に、主導権を発揮できなかつた。また、イングランド内のアングロ=サクソン (Anglo-Saxon) 系のアール (Earl: アングロ=サクソン時代からのアルダーマン the Ealdorman, 地方豪族、伯爵) や、ノルマンディー系のバロン (Baron: 国王から直接に封土を受け取っている家臣、貴族)、ナイト (Knight: 騎士) たちに軽視され、許可なしに、城郭の建造、増築をさせてしまった。

これらのことが、イングランド国内の内乱を勃発させ、無政府状態、暗黒時代を引き起こしたのであった。

このような状況下では、イングランド国内の経済は、衰退する一方で、何ら国民にとってプラスになることはなかつた。

アンジュー伯アンリ=プランタジネットが、イングランド王に即位して、ヘンリー 2 世になり、まず初めに行わなければならなかつたことは、この無政府状態から脱却して、秩序ある政府を立ち上げることであった。

ヘンリー 2 世は、イングランド国内の秩序回復に、教会の力を借りようとした。

その教会の力とは、カンタベリー大司教トマス=ベケット (Thomas Becket, c. 1118-1170.12.29, 在位 1162-1170.12.29) の力である。

だが、その後の両者の考え方が、少しずつずれ、結果的に、トマス=ベケットが殺害されてしまった。

そこで本稿では、アンジュー伯アンリ=プランタジネットが、どのようにしてイングランド王位を継承したのか、またイングランド王に即位したヘンリー 2 世が、なぜトマス=ベケットを殺害しなければならなかつたのか、を考察する。

2) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, *ibid.*, p. 34.

II 王位継承

ヘンリー2世の王位継承に関して、まず初めに、考えなければならない時点は、祖父ヘンリー1世 (Henry I, Beauclerc, 1100-1135.12.1) の晩年からである。

というのは、1135年12月1日ヘンリー1世死後、1154年12月19日ヘンリー2世が王位を継承するまで、イングランド、およびノルマンディーで、戦争、内乱が勃発し、世情が渾沌とし、イングランド王国内の行政、国防、経済が機能していなかったからである。

ヘンリー1世は、1127年1月、ロンドンの大諮問会 (great council) で、イングランドの王位継承者に、長女アデレード (Adelaiide, 1102-1167.9.10)、すなわちエムプレス＝モード (Empress Maud) を、指名した³⁾。

この大諮問会で、甥で、当時ブロア伯であったスティーヴンは、エムプレスモードに対し、「臣従の礼を執る」ことを誓約させられた⁴⁾。

ブロア伯スティーヴンが、エムプレスモードに対し、「臣従の礼を執る」ということは、「イングランドの王位継承を断念する」ということを、意味しているのである。

だが、ヘンリー1世死後、イングランド王位を継承したのは、誓約に違反したブロア伯のスティーヴンであった。

ブロアのスティーヴンは、ヘンリー1世が、死に際に、王位継承者に、長女エムプレス＝モードではなくて、甥の自分を指名したと主張し、そしてエムプレス＝モードよりも先に、1135年12月22日イングランド王に即位し、1135年12月26日に、ウェストミンスター＝アベイ (Westminster Abby) で戴冠した⁵⁾。

3) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *The History of England from the Norman Conquest to the Death of John (1066-1216)*, Reprinted of 1905, ed., Ams Press, Kraus Reprint Co., 1969, p. 176.

4) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 176.

5) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 191.

・Marjoria Chibnall, *The Empress Matilda; Queen Consort, Queen Mother and Lady of the English*, Reprinted of 1991, ed., Blackwell, 1993, p. 65.

・Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 34.

だが、この主張は、かなり疑わしかった⁶⁾。

この疑わしい主張にもかかわらず、ブロアのステイーヴンが、イングランド王位を継承できたのは、2つの要因がある。

1つ目は、宿敵アンジュー伯に嫁いだエムプレス=モードに対して、嫌悪感、警戒心を抱いた有力なアールやバロンたちが、ブロアのステイーヴンを、擁護したからである⁷⁾。

2つ目は、女系の王位継承を禁じたサリカ法 (Lex Salica : Salic Law) は、当時はもう廃れていたが、伝統的に男系の王位継承を望む有力なアール、バロン、ロンドン市民たちが、抵抗感を抱き、ブロアのステイーヴンを、支持したからである⁸⁾。

1136年、エムプレス=モードは、この誓約違反を、ローマ教皇インノケンチウス2世 (Pope Innocentius II, 1130-1143) に訴えた⁹⁾。

だが、ローマ教皇は、このエムプレス=モードの訴えを、却下した。

この却下理由は、当時ステイーヴン王とローマ教会とが、友好関係にあった¹⁰⁾からである。

この却下により、エムプレス=モードとステイーヴン王との間に、王位継承を巡り内乱、いわゆる無政府状態がはじまった。

この無政府状態の中、ロンドン、チープサイド (Cheapside) のギルバート=ベケット (Gilbert Becket) と妻マティルダ (Matilda) は、敬虔なカトリック教徒になっていた。この2人から、将来、カンタベリー大司教となる、トマス=ベケットが、1118年12月21日に生まれていた。

父ギルバート=ベケットは、ノルマンディー、ルーアン (Rouen) 出身で、

6) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 191.

7) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, Domesday Book to Magna Carta 1087-1216, Reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 131.

8) David Hume, *The History of England; from the Invasion Julius Caesar to The Revolution in 1688*, Vol. 1, Reprinted of 1778, ed., *Liberty Classics*, 1983, p. 279.

9) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, op. cit., p. 202.

10) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 203.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

ナイト (Knight) であり、ロンドンの州長官をも務めたことのある、絹貿易商であった。また、母マティルダは、カン (Caen) 出身であった。

この両親から、チープサイドで生まれたトマス＝ベケットは、1128年、10歳で、サセックスのマートン小修道院 (Merton priory) で教会法と、グラマー・スクールで上級教育を学んだ。

そして、トマス＝ベケットは、家庭が裕福であったため、この1136年の18歳時には、パリの大学に行き、論理学、修辞学、哲学を学んでいた。

イングランド王国内で、この内乱が始まってから、約20年後、アンジュー伯アンリ＝プランタジネットが、イングランド王位を継承し、ヘンリー2世となり、内乱が収まった。

この内乱の経緯が、非常に重要である。

というのは、この内乱の無政府状態のなかで、アンリ＝プランタジネットが、ノルマンディー公、アンジュー伯ヘンリー2世となり、またその経緯のなかで、アンリ＝プランタジネットが、イングランドの国政を指揮するための素養を、身につけていったからである。

イングランド王スティーヴン (Stephen de Blois, c. 1097-1154: 在位1135-1154) の後、第1位王位継承者と考えられていたのは、彼の唯一の法的長男ウィリアム＝ジ＝アセリング (William the Aetheling, 1103-1120. 1125) であった。

だが、ウィリアム＝ジ＝アセリングは、新船ブランシュ＝ネフ (La Blanche Nef : ホワイト＝シップ White Ship) の人的海難事故に遭い、1120年11月25日に、亡くなった¹¹⁾。

このことにより、スティーヴン王の次の王位継承が、混沌としてきた。

スティーヴン王治世当時の有力者、すなわちスティーヴン王の地位をも脅かしていた人物に、ヘンリー1世の長女であり、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ5世 (Heinrich V, c. 1081-1125 : 在位 1106-1125) の未亡人であり、アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネット (Geoffroi Plantagenet, Count de Anjoum :

11) W. Farrer, Litt. D., "An Outline Itinerary of Henry the First: Part II, *The English Historical Review*, Vol. 34, 1919, p. 513.

Geoffrey of Anjou 1113.7.24-1151.9.7) と再婚したエムプレス=モード (Empress Maud, 1102-1167: ヘンリー 1 世の長女アデレード Adelaiide) がいた¹²⁾。

なお、アンジュー伯ジョフロワ=プラントジネットとエムプレス=モードとの再婚により、1133年3月5日、アンジューのル=マン (Le Mans) で、長男アンリ=プラントジネット (Henry Plantagenet) が誕生した。

このステューヴン王とエムプレス=モードとが、イングランドの王位継承を巡って、戦争および内乱を、引き起こした。

この戦争および内乱とは、イングランド北部で勃発したスコットランドとの戦争、すなわち①1138年8月22日のスタンダードの戦い、あるいは聖旗の戦い (The Battle of Standard)、イングランド国内で勃発した内乱が激化した戦争、すなわち②1141年2月2日のリンカーンの戦い (The Battle of Lincoln) である。

この戦争および内乱を起こした直接的な要因は、ステューヴン王の性格が、優柔不断 (irresolute)、柔弱 (weakness) であった¹³⁾ からである。

このことは、次のことから判断できる。

すなわち、バロンや、アールたちの機嫌を取るために、重要な官職をばら撒き、また彼らの勝手な行動、すなわち無許可な築城に目をつぶっていたこと¹⁴⁾。

また、デイヴィッド 1 世の友好を得るために、彼の息子ヘンリー (Henry of Scotland, 後のハンティングダン伯 Earl of Huntingdon, d. 1152) に、カーラ

12) ヘンリー 1 世の長女アデレードは、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ 5 世と結婚して、皇后という称号を得ると共に、自分の名前を、実母の名前マティルダに改名し、エムプレス=マティルダ (Empress Matilda) になった。マティルダは、アングロ=サクソン人たちに人気があり、サクソン語でモードと呼ばれるようになった。いわゆるエムプレス=モードである。その後、エムプレス=モードは、ハインリッヒ 5 世が亡くなり、イングランドに戻った時、称号のエムプレスが剥がれていた。だが、本稿では、多数のマティルダと区別するために、またあえて称号のエムプレスを付けて、ヘンリー 1 世の長女を、エムプレス=モードとすることにした。

13) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland, op cit.*, p. 35.

14) Cyril E. Robinson, *England: A History of British Progress from the Early Ages to the Present Day*, Thomas Y. Crowell Company, 1928, p. 64.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

イル (Carlisle) と、ダンカスター (Doncaster) とを与える、と曖昧な約束をしたこと¹⁵⁾。

さらに、ヘンリー1世の庶子の1人で、エムプレス＝モードの異母兄であるグロスター伯ロバート (Robert, Earl of Gloucester, c. 1090-1147.10.31) が、ステイーヴン王が王としての資質に欠け、失策により統治能力なしとみなし¹⁶⁾、王に反旗を翻し、エムプレス＝モード側に就いたことである¹⁷⁾。

このような状況下のもとで、下記2つの戦争および内乱が避けられなかった。
・1138年8月22日スタンダードの戦い、聖旗の戦い (The Battle of Standard)

このスタンダードの戦い、聖旗の戦いは、エムプレス＝モードの叔父、スコットランド王ディヴィッド1世 (David I, 1084-1153, 在位 1124-1153) が、イングランドのヨークシャ北部、ノースアラトーン (Northallerton) 近くのコウトン (Cowton) に侵攻し、スタンダード＝ヒル (Standard Hill) で遭遇し、始まった。

結果は、ステイーヴン王のイングランド軍が、スコットランド軍よりも、軍事規模において劣っていたが、指揮命令系統が整っていたので勝利した。

これにより、ステイーヴン王は、カーライルを含むカンバーランド (Cumberland) を占領した¹⁸⁾。

敗北したディヴィッド1世は、一旦、スコットランドに撤退し、再度、強力な軍事力で持って、イングランドに侵攻した。

この侵攻は、1139年1月から9月にかけて、ノーサンバーランド (Northumberland)、カンバーランドを、占領するまで続けられた。

そして、スタンダードの戦い後の衝突を回避させるために、ステイーヴン王の妻クイーン＝マティルド (Queen Matilda: マティルド＝オヴ＝ブーロー

15) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 199.

16) Cf. Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 64.

17) Kenneth O. Morgan, edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, John Gillingham, "The early middle Ages (1066-1290)", Reprinted of 1984, ed., Oxford University Press, 1993, p.120.

18) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 64.

ニュ Matilda of Boulogne, c. 1105-1152.5.3) は、1139年4月9日、ダラム (Durham)において、ステイーヴン王とスコットランド王デイヴィッド1世との和平条約を、締結させた¹⁹⁾。

この和平条約において、ステイーヴン王は、デイヴィッド1世の息子ヘンリーに、ハンティングダン伯への復位を認めるとともに、ノーサンバーランド伯をも与えた²⁰⁾。

だが、和平条約締結後も、イングランド王国内では、反ステイーヴン王派が、反乱を起こした。というのは、肅清のため、ステイーヴン王から、重要な官職を外されたバロンやアールたちが、エムプレス=モード派に付いたからである。

言い換えると、失脚させられたバロンやアールたちは、その後、ステイーヴン王から何ら手当てを受けなかったからであり、当然の結果であった。

また、ステイーヴン王が、教会に介入したことに対し、司教たちは、反旗を翻した。

というのは、ステイーヴン王が、国政に悪影響を及ぼすとして、1139年6月、ヘンリー1世治世時、大司法官であった、ソールズベリー司教ロジャー (Roger, Bishop of Salisbury, d. 1139)²¹⁾ と、ロジャーの甥リンカーン司教アレキサンダー (Alexander, Bishop of Lincoln) とを、逮捕したからである²²⁾。

この逮捕により、ステイーヴン王は、ソールズベリーと、リンカーンとを、自己の勢力下に置いた。

このことが要因となり、ステイーヴン王は、教会からの支持を失い、ステイーヴン王の実弟である、ウィンチェスター司教ヘンリー (Henry, Bishop

19) ・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, Second Edition, Domesday Book to Magna Carta 1087-1216, Reprinted of 1955, ed., Oxford University Press, 1986, p. 272.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 223.

20) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 223.

21) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 134.

22) ・Marjoria Chibnall, *The Empress Matilda*, *op. cit.*, p. 79.

・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 138.

George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 224-225.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

of Winchester, 1126-1171) からも、反旗を翻された。

当時、司教といえば、聖職者であると共に、国王の代理人であり、バロンと同様、相当数の城と、かなりの軍事力を備えていた。

当然、ウィンチェスター司教ヘンリーも、聖職者であり、軍人であった。

また、特に、ダラム (Durham) 司教と、ウィンチェスター司教とは、イングランド王国の存亡をも左右する重要なポストであった。

ダラムは、対スコットランドでの重要な軍事的拠点であった。

また、ウィンチェスターには、王室財宝の保管場所があった。

そこで、実弟のウィンチェスター司教から支持を得られないということは、兄ステイーヴン王は、戦費を調達できないということ、意味している。

また当時、ローマ教皇は、国王の破門権を持ち、国王よりも優位な立場にあった。

そこで、ステイーヴン王が、司教たちによって、反旗を翻されたということは、エムプレス＝モードに、侵攻の余地を与えたということの意味しているのである。

だが、依然として、ステイーヴン王の方が、優位であった。

このような状況を打開するために、1139年9月末日、エムプレス＝モードの支持者とエムプレス＝モードの異母兄グロスター伯ロバートとが、ノルマンディーで合流し、ステイーヴン王と対決するために、イングランド南部アランデル (Arundel) に、侵攻してきた²³⁾。

イングランドに侵入した異母兄グロスター伯ロバートは、エムプレス＝モード軍の軍司令官として働き、各地での過激な反乱を誘発させていった。

この1139年の内乱の中、21歳のトマス＝ベケット、両親の死亡により、仕送りがなくなり、パリの留学から、イングランドに帰って来た。

イングランドに戻った21歳のトマス＝ベケットは、父の友人で、偉大なバロンの1人、リシェ＝デュ＝ラギル (Richer de Laigle) にお世話になり、彼の

23) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 226.

ペヴェンシ (Pevensey) の城で、騎士道 (Knighthood) を身につけ、そして、州長官の庁舎において、会計士として、また聖職者 (clerk) として働いた²⁴⁾。

イングランドの内乱は、主にロジャーの甥イーリー司教ナイジェル (Nigel, Bishop of Ely) が、ステイーヴン王に失脚させられた後、1140年にステイーヴン王を攻撃するために、司教管区内で企てられた内乱であった²⁵⁾。

・1141年2月2日リンカーンの戦い (The Battle of Lincoln)

1140年のイーリー司教ナイジェルの反乱は、リンカーンを始め、イングランド各地に飛び火し、イングランドは、無政府状態に陥った。

1140年12月初め、リンカーンを制圧するために、ステイーヴン王と行動を共にしていたチェスター伯ラヌルフ=ドゥ=ガルノン (Ranulf de Gernon, Earl of Chester) は、ステイーヴン王から、カーライルを含む北西の土地を、与えて貰えなかったので、王に反旗を翻し、エムプレス=モード派に付き、リンカーン城 (the Castle of Lincoln) を占拠した²⁶⁾。

これに対し、ステイーヴン王は、リンカーン城を、包囲した²⁷⁾。

この包囲に危険を感じたチェスター伯ラヌルフ=ドゥ=ガルノンは、一旦、このリンカーン城から離れ、チェスターに戻り、自己の軍隊を整え、かつグロスター伯ロバートの支援軍と合流し、再び、リンカーン城に戻った²⁸⁾。

そして、この両軍が衝突したのが、1141年2月2日のリンカーンの戦いである²⁹⁾。

このリンカーンの戦いは、グロスター伯ロバート軍の方が、ステイーヴン王軍よりも、ヨリ指揮命令系統が、良く整っていたので、勝利した。

24) ・ Cf. A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.

・ Cf. Philip W. Goetz, Editor-in-Chief, *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 2, Fifteenth Edition, Encyclopædia Britannica, Inc., 1985, p. 31.

25) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 229.

26) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda; Queen Consort, Queen Mother and Lady of the English*, Reprinted of 1991, ed. Blackwell, 1993, pp. 93-94.

27) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *ibid.*, p. 94.

28) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *ibid.*, pp. 94-95.

29) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *ibid.*, p. 95.

30) ・ Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *ibid.*, p. 95.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 232.

敗れたスティーヴン王は、グロスターで待機していたエムプレスモードの所まで連れて来られて、ブリストル城 (Bristol Castle) に、幽閉された³⁰⁾。

勝利したエムプレス＝モードは、イングランドの王位を要求するために、待機していたグロスターから、首都ロンドンの1部を占領し、1141年3月2日ロンドン市内に入った³¹⁾。

ロンドンにおいて、エムプレス＝モードは、彼女の支持者、司教、バロンたちによって、「イングランドの国母 (‘Lady of England’)」という称号を、贈られた³²⁾。

だが、エムプレス＝モードは、実際に、王位を継承することができなかった。というのは、エムプレス＝モードが、プロイセンとアンジューとに、余りにも長く居すぎて、フランス語を喋ったり、多額の資金を要求したり、ローマ教皇によってもたらされた平和期間を破ったり、無神経な行動をしたりして、ロンドン市民を、怒らせたからである³³⁾。

このロンドン市民の怒りが、結果的に、エムプレス＝モードを、ウェストミンスター＝アベイ (Westminster Abbey) での、戴冠式を挙行させなく、イングランドの女王にさせなかった³⁴⁾。

逆に、スティーヴン王の方が、依然として、ロンドン市民に、人気があった。

ロンドン市民の反発、そしてウィンチェスター司教ヘンリーが、再度、実兄スティーヴン王側に付いたことにより、対エムプレス＝モードが、激化した。

ロンドン市民からの反発が、激しくなる中、エムプレス＝モードは、ついに1141年6月24日、ロンドンを離れなければならなかった。

これに呼応して、クイーン＝マティルドは、夫スティーヴン王救出のため、

31) ・ Cf. A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197.

・ Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 233.

32) Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *op. cit.*, p. 98.

33) ・ Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.121.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 235.

34) Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.121.

支援軍を組織し、反撃に出た。

支援軍は、1141年9月14日、エムプレス＝モードの軍司令官、グロスター伯ロバートを、ウィンチェスター郊外ストックブリッジ (Stockbridge) で捕らえ、ケント (Kent) のロチェスター城 (Rochester Castle) に収監した³⁵⁾。

エムプレスモードは、異母兄グロスター伯ロバートを救出するために、幽閉していたスティーヴン王と、1141年11月1日、捕虜交換した³⁶⁾。

この1141年に、23歳のトマス＝ベケットは、親戚の1人、ロンドンの上級裁判所判事、オスバート＝フートデニアース (Osbert Huitdenirs) の秘書になった。そして、トマス＝ベケットは、秘書職において、大きな能力を発揮し、政治、経済に精通するようになった³⁷⁾。

解放されたスティーヴン王は、再び王座に就き、勢力を回復させるため、再びエムプレス＝モードと対立することとなった。

言い換えると、内乱の再燃ある。

優位に立っていたスティーヴン王の攻撃に対処するために、エムプレス＝モードの異母兄グロスター伯ロバートは、1142年6月、ノルマンディーに渡った。

すなわち、彼女の夫であるアンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットに軍事支援を求めるためであった。この要求は、1142年秋まで続けられた。

1142年6月中旬、スティーヴン王は、エムプレス＝モードがイングランドに渡ってから、失っていた地域での勢力回復に、全力で努めた³⁸⁾。

1142年夏、スティーヴン王軍の攻撃が激しさを増すにつれて、エムプレス＝モードは、オックスフォード城 (Oxford Castle) に、逃げ延びた。

1142年秋、アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットから軍事支援が得られた、グロスター伯ロバートは、ジョフロワの名代として、9歳の長男アンリ

35) · A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 144.

· Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda*, *op. cit.*, p. 115.

36) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 144-145.

37) · Cf. A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 197.

· Cf. Philip W. Goetz, Editor-in-Chief, *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 31.

38) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 236.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

＝プラントジネットと共に、約300～400名の騎兵隊とを連れて、イングランドに帰って来た³⁹⁾。

なお、夫のアンジュー伯ジョフロワ＝プラントジネットは、妻のエムプレス＝モードを助けるために、グロスター伯ロバートと、行動を共にして、イングランドにやって来なかった。

というのは、アンジュー伯ジョフロワ＝プラントジネットが、アンジューの宿敵ノルマンディー攻略に、手一杯であったからである。

この1142年という年は、9歳アンリ＝プラントジネット、後のヘンリー2世がイングランドに初めて渡航した年であった⁴⁰⁾。

また、1142年の秋、イングランドに初めてやって来た9歳の長男アンリ＝プラントジネットは、4年間、堅牢なブリストル (Bristol) の要塞に留まり、伯父グロスター伯ロバートの保護のもと、家庭教師にいろいろなことを教わった⁴¹⁾。

このアンリ＝プラントジネットの第1回目のイングランド渡航は、対ステイヴン王であったが、9歳の少年には、指揮が取れない。実際に指揮を執ったのは、グロスター伯ロバートであり、アンリ＝プラントジネットは、ただ単に、戦術のノウハウと、自己軍が徐々に破れていくのを、体験したのであった。

9歳のアンリ＝プラントジネットの目に映ったのは、アールやバロンたちが、少しでもヨリ多くの領地を獲得するために、敵味方に分かれ、また裏切りや寝返りによって、内乱が勃発していた、ということであった。また、彼は、

39) G. B. アダムス氏の研究 (George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 238.) によると、1142年のアンリ＝プラントジネットの年齢が10歳となっているが、前後の文脈から、9歳とした。

・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 145.

40) 9歳のアンリ＝プラントジネット、後のヘンリー2世は、1142年の秋、生まれて初めて、グロスター伯ロバートと共に、イングランドにやって来た。このとき、アンリ＝プラントジネットは、イングランド語が喋れなく、フランス語のみであった。その後、4年間のイングランド滞在中、家庭教師によって、イングランド語を学んだとしても、考え方は、フランスのアンジュー的な考え方であった。その考え方とは、フランス的な厳格な封建制のみが、国内を安定させる、ということであった。

41) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 238

この内乱、つまり国内が無秩序、無政府状態に陥った原因として、イングランド国内に、厳格で強力な封建的国王が存在していない、ということも悟った。

更なる、スティーヴン王軍の攻撃、包囲により、身の危険を感じたエムプレス=モードは、再び、このオックスフォード城からも、逃げ出さなければならなくなっていた。

1142年12月、クリスマス近くなった日、吹雪で真っ白になった冬の夜、エムプレス=モードは、真っ白なクローク (cloak) を着て、3～4名のナイト (Knight：騎士) を伴い、このオックスフォード城の塔から、ロープで密かに降り、裏門から、凍りついたテムズ川 (the frozen Thames) を横切り、吹雪で凍結した困難な道を、7～8マイル先のアビンドン (Abingdon) まで歩き、脱出した⁴²⁾

そして、その後、エムプレス=モードは、アビンドンで馬を見つけ、乗馬して、安全なウォリングフォード (Wallingford) に逃げた。

このオックスフォード城からの脱出を助けたのは、異母兄グロスター伯ロバートであり、彼もワーリングフォードに行き、エムプレス=モードと合流した。

この時、グロスター伯ロバートに付き添っていた、9歳の長男アンリ=プランタジネットも、母エムプレス=モードと合流した⁴³⁾。

この1142年に、24歳のトマス=ベケットは、父親と同郷であったノルマンディーの修道士・カンタベリー大司教テオバルドゥス (Theobald, c. 1090-1161：在位 1138-1161) に仕えるために、彼の廷に入った。

この1142年に、9歳のアンリ=プランタジネットと、24歳の法官トマス=ベケットとが、初めて出会っていた、と思われる。

というのは、9歳のアンリ=プランタジネットが、伯父グロスター伯ロバートの保護のもと、堅牢なブリストルの要塞に留まり、家庭教師に、政治、経済、教会について教わるなか、アンジュー家と教会の敵であるスティーヴン王を倒

42) ・Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, p. 117.

・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 145-146.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 238.

43) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 238.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

すという、共通の目的のため、24歳のトマス＝ベケットと出会っていた、と思われるからである。

この時2人の仲は、初めて出会ったということと、9歳のアンリ＝プランタジネットには、常に家庭教師が付き添っていたため、仲良しになったというのではなく、ただ顔見知りになったという程度のものである。

カンタベリー大司教テオバルドゥス廷に入ったトマス＝ベケットは、カンタベリー大司教テオバルドゥスから、才能（行政能力、知性、外交手腕）を見出され、ローマ法と教会法を学ぶ任務のもと、1143年に1年間、大陸留学させてもらった。すなわちトマス＝ベケットは、イタリアのボローニャ大学(Bologna)でローマ法、フランスのオセール大学(Auxerre)で教会法を学んだ⁴⁴⁾。

1144年1月20日、アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットが、ノルマンディー攻略に成功した。そして、アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットは、ノルマンディー公爵という称号も得た。

だが、この間、イングランドで戦っていた、妻のエムプレス＝モードと彼女の異母兄グロスター伯ロバートとの形勢は、一層悪化し、ついに1145年、ファリングトンの戦い(The Battle of Faringdon)になった。

結果は、スティーヴン王の勝利であり、エムプレス＝モードとグロスター伯ロバートとの敗北であった⁴⁵⁾。

この敗北により、エムプレス＝モードは、テムズ川流域と彼女のグロスターシャー要塞地との補給路を断たれてしまった⁴⁶⁾。

軍事的に小規模になったにも関わらず、エムプレス＝モード軍、および彼女の支持派軍は、依然として、スティーヴン王軍に抵抗し続けていった。

スティーヴン王側の立場から言うと、イングランド王国内を平穏にさせるた

44) ・ Cf. Philip W. Goetz, Editor-in-Chief, *The New Encyclopaedia Britannica*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 31

・ A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 197, n. 5.

45) Plantagenet Somerset Fry, *The Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 35.

46) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 148.

めに、エムプレス=モードとグロスター伯ロバートとの連合軍、およびその支持軍を、徹底的にたたかなければならなかった。

スティーヴン王軍の優勢に対して、1146年、4年間、堅牢なブリストル要塞に留まっていた14歳の長男アンリ=プランタジネットは、イングランドを離れ、アンジューに戻った。

また、1147年10月31日、エムプレス=モード軍の司令官、グロスター伯ロバートが亡くなった。

結果、軍の士気低下が避けられなくなったエムプレス=モードは、1148年2月、イングランドに失望し、野望半ばにして、夫の居るアンジューに引き返した。

アンジューに戻ったエムプレス=モードは、何が何でも、イングランド王位に固執し、自分が不可能であれば、息子の長男アンリ=プランタジネットに、王位を継承させたいと、考えるようになった。

1148年11月、スティーヴン王は、教会との闘争、すなわち教会の増加と取入とを認めるか、どうかという論争に、和平的に教会に賛成した。

この賛成をもたらしたのは、カンタベリー大司教テオバルドゥスであった。

また、この論争において、パリ留学から帰国していた30歳の法官トマス=ベケットは、カンタベリー大司教テオバルドゥスを補佐すると共に、イングランド救済させるための、ものの考え方と方法論を学んだ⁴⁷⁾。

1149年、16歳の長男アンリ=プランタジネットは、母エムプレス=モードの野望と、アンジュー家の勢力拡大のため、すなわちスティーヴン王を倒すため、イングランドにやって来た。なお、彼にとって第2回目のイングランド渡航であった⁴⁸⁾。

この16歳時のアンリ=プランタジネットは、9歳時のお伴と違い、軍の司令官としてであった。

北部からスコットランド王デイヴィッド1世の支援を受けたにもかかわらず、

47) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 244.

48) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 244.

49) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 244.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

アンリ＝プランタジネットは、軍事力が小規模で、かつ軍資金も乏しかったので、スティーヴン王に、打ち負かされてしまった。そして、その結果、彼は、ノルマンディーに、帰らざるを得なくなった⁴⁹⁾。

この1149年に、16歳のアンリ＝プランタジネットと、31歳の法官トマス＝ベケットとが、出会っていた、と思われる。

というのは、軍事力が乏しいアンリ＝プランタジネットにとって、かなりの軍事力を有する教会に支援を求めため、法官トマス＝ベケットに、接触した、と思われるからである。

だが、アンリ＝プランタジネットにとって、法官トマス＝ベケットから、支援を受ける以前に、傭兵に支払うお金に尽き、ノルマンディーに戻らなければならなくなっていた。

ブロア家、ノルマンディー王家の王位継承を確実にするために、スティーヴン王は、次期イングランド王位継承者に、息子ブローニュー伯ウスタシュ4世 (Eustache IV, c. 1130-1153.8.17：ユースタス Eustace：在位 1151-1153) の承認を得たいと計画した⁵⁰⁾。

この計画を、スティーヴン王が切に願ったのは、ノルマンディー家の宿敵である、アンジュー家では、順調に、アンリ＝プランタジネットが成長し、実力を付けていたからである。

また、この計画は、もし、イングランド王である私スティーヴンに、何か起こったら、ブロア家、延いてはノルマン王家が絶えてしまうという、危機感からでもある。

この危機感を払拭するために、当然、スティーヴン王は、次期イングランドに、息子のウスタシュ4世を即位させる承認を、アール、バロン、教会から得たかった。

スティーヴン王の意思をくんだヨーク大司教ヘンリー＝ムーダック (Henry Murdac, Archbishop of York) は、1151年、ローマ教皇エウゲニウス3世 (Eugenius III, 在位1145-53) に、ウスタシュ4世の王位継承の認可を求めた。

50) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 245.

だが、ローマ教皇エウゲニウス3世は、この認可を、拒否した。

というのは、ローマ教皇が、王位継承が係争中の問題であると判断したからである。

ローマ教皇がこのように判断できたのは、ウスタシュ4世の王位継承を拒否する旨の手紙を、法官トマス＝ベケットから、秘かに受け取っていたからである。

そして、ローマ教皇は、ウスタシュ4世の王位継承に関する拒否の決定を、カンタベリー大司教テオバルドゥス (Theobald, c. 1090-1161: 在位1138-1161) に伝えた⁵¹⁾。

ローマ教皇エウゲニウス3世によって、ウスタシュ4世の王位継承が拒否されたのは、法官トマス＝ベケットの外交手腕であった。

父ステューヴン王の期待に応えるため、ウスタシュ4世は、父とフランス王ルイ7世 (Louis VII, 1137-1180) と共に、ノルマンディー侵入した⁵²⁾。

この侵入は、1151年の夏に、2回行われた。

第1回目の侵入は、ルイ7世が指揮し、最前線で、アンリ＝プランタジネットに遭遇したが、戦闘は、起こらなかった。

第2回目の侵入は、ルイ7世が発熱で、パリにいたため、戦闘ではなく、和平交渉になった⁵³⁾。

この和平交渉のため、アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットと息子のアンリ＝プランタジネットとが、パリに赴いた。

この和平交渉において、父アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットが攻略し、征服していたノルマンディーの領地を、息子のアンリ＝プランタジネットが継承するということが、正式にフランス王ルイ7世によって承認され、アンリ＝プランタジネットが、ノルマンディー公アンリ＝プランタジネットになった⁵⁴⁾。

また、このパリの和平交渉において、初めてアンリ＝プランタジネットは、

51) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 246.

52) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 246.

53) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 246.

54) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 246.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

ルイ7世のお妃、アキテーヌの女子相続人アリエノール＝ダキテーヌ (Aliénor d' Aquitaine : Eleanor of Aquitane, 1122-1204) と会った⁵⁵⁾。

Ⅲ アリエノール＝ダキテーヌ

1151年夏、アンリ＝プランタジネットにとって、アリエノール＝ダキテーヌとの出会いが、その後、巨大な領地を有する、イングランド王ヘンリー2世になっていく最大の要因であった。

また、この出会いが、その後のイングランド vs. フランスの百年戦争へとなった要因でもあった。

というのは、アリエノール＝ダキテーヌの子供たちや子孫たちが、フランスの王や王妃、イングランドの王や王妃になっていったからである。

1151年の夏、2回までも行われたノルマンディーの侵入に対して。ノルマンディー公アンリ＝プランタジネットは、1151年9月14日、イングランド侵攻を決意した。

だが、この侵攻は、1151年9月7日、39歳の父アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットが熱病に罹り、亡くなっていたため、取りやめになった⁵⁶⁾。

父アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットの死去後、1151年の年末、ノルマンディー公アンリ＝プランタジネットは、順調に、アンジュー伯領を受け継ぎ、ノルマンディー公、およびアンジュー伯アンリ＝プランタジネットになった⁵⁷⁾。

アンジュー家に対する危機感が一層強まるにつれて、スティーヴン王は、息子のウスタシュ4世の即位に、最大限に努力した。

具体的には、1152年4月初旬、ロンドンで、スティーヴン王は、王国の、す

55) Cf. Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, pp. 154-155.

56) アンジュー伯ジョフロワ＝プランタジネットの死亡が、Marjorie Chibnall, *The Empress Matilda, op. cit.*, p. 155. では、1151年9月14日となっているが、A. L. Poole, *The Oxford History of England, Vol. 3, op. cit.*, p. 162. とGeorge Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, op. cit.*, p. 244. とに従い、1151年9月7日にした。

57) George Burton Adams, *The Political History of England, Vol. 2, op. cit.*, pp. 246-247.

なわちスティーヴン王に従属する機関である大諮問会 (great council) で、息子ウスタシュ4世の王位継承を要求した。

だが、この要求は、カンタベリー大司教テオバルドゥスによって拒否された。また、スティーヴン王の弟である、ウィンチェスター司教ヘンリーを主として、高位聖職者たちによっても拒否された。⁵⁸⁾

この努力が報われなかった理由は、スティーヴン王が、教会権に介入しすぎている、ためであった。

スティーヴン王の要求を拒否したカンタベリー大司教テオバルドゥスは、身の危険を感じ、大陸に逃げた。

また、スティーヴン王の妻クイーン=マティルドが、1152年5月3日に亡くなった。

最愛なる妻を亡くしたスティーヴン王は、息子のウスタシュ4世の継承問題と共に、憔悴しきってしまった。

さらにその後、ノルマンディー公、およびアンジュー伯アンリ=プランタジネットは、フランスのルイ7世と、近親婚のため1152年3月、離婚したアキテーヌの女子相続人アリエノール=ダキテーヌと、1152年5月18日結婚した⁵⁹⁾。

アリエノール=ダキテーヌがルイ7世と離婚した理由は、彼女がアンジュー伯アンリ=プランタジネットと不倫 (misconduct) していたためであった⁶⁰⁾。

この結婚により、アンジュー伯アンリ=プランタジネットは、アキテーヌ公領を支配下に置くことになり、結果的にフランス全土の3分の2を支配し、フランス王ルイ7世よりも、ヨリ広い領地を、掌握することになった。

領土が拡大するということは、軍事力が拡大するということを意味し、発言力も増すということの意味する。

アンジュー伯アンリ=プランタジネットのフランス王国内での領土拡大に対して、危機感を持ち、また自分の王妃を奪われた腹癒せにより、ルイ7世は、

58) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 249-250.

59) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 163.

60) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 162.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

再び、スティーヴン王の息子ブローニュー伯ウスタシュ4世と手を結び、またアンジュー伯アンリ＝プランタジネットの弟ジョフロワ（Geoffroi : Geoffrey, 1134.6.1-1158）を仲間に入れ、1152年7月ノルマンディーに侵入した⁶¹⁾。

この侵入は、当然、アンジュー伯アンリ＝プランタジネットの領土を割き、縮小させるためであった。

アンジュー伯アンリ＝プランタジネットは、この侵入を、軽く撥ねつけた。教会による息子ブローニュー伯ウスタシュ4世の王位継承の拒否、妻クイーン＝マティルドの死去、宿敵アンジュー伯アンリ＝プランタジネットの領土拡大、これらのマイナス要因によって、スティーヴン王は、精神的に追い詰められた。

結果として、スティーヴン王は、精神的プラスになるように、宿敵アンジュー伯アンリ＝プランタジネットと、徹底的に戦うことを、表明した。

この表明を聞いたカンタベリー大司教テオバルドゥスの代理、法官トマス＝ベケットは、1153年1月初旬、イングランドの治安を守るために、アンジュー伯アンリ＝プランタジネットを、イングランドに招くことにした⁶²⁾。

領土的に優位に立ったアンジュー伯アンリ＝プランタジネットは、法官トマス＝ベケットの招きと、母エムプレス＝モードの野望であるイングランドの王位を要求するために、イングランドの侵攻を計画した⁶³⁾。

イングランドに侵攻することになったアンジュー伯アンリ＝プランタジネットは、最初、小規模な軍隊で、イングランドに侵攻することになった。

だが、アンジュー伯アンリ＝プランタジネットが、イングランドに上陸、侵攻する前から、彼を支持する多くのバロンたちが、各地から集合してきた⁶⁴⁾。

そして、当時最大の軍事力を有することになったアンジュー伯アンリ＝プラ

61) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 249.

62) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 250.

63) Nicholas Hooper & Matthew Bennett, *Cambridge Illustrated Atlas of Warfare, The Middle Ages 768-1487*, Cambridge University Press, 1996, p. 50.

64) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, Artus Publishing Company Ltd., 1982, p. 19.

ンタジネットは、1153年1月初旬、船舶36隻、弓兵140人、歩兵3,000人を引き連れて、イングランドに侵攻した⁶⁵⁾。

イングランドに上陸したアンジュー伯アンリ=プランタジネットは、法官トマス=ベケットと会い、アンジュー家と教会の敵、スティーヴン王を倒すということに、意気投合し、仲良しになった。

イングランを制圧するためには、イングランド王スティーヴンを、捕えなければならない。

その第1歩として、アンジュー伯アンリ=プランタジネットは、ブリストルとウォリングフォードとの中間にある、重要なマームズベリー城 (Castle of Malmesbury) を、攻撃することにした。

このマームズベリー城は、スティーヴン王が占領していた城であり、この城の陥落を、彼は防げなかった。

これにより、アンジュー伯アンリ=プランタジネットのウォリングフォード駐留軍は、助けられ、反対に、ウォリングフォード城を土塁で囲んでいたスティーヴン王軍は、アンジュー伯アンリ=プランタジネット軍によって、包囲された⁶⁶⁾。

だが、両軍は、ウォリングフォード城で、対峙したまま、戦闘は、起こらなかった。

というのは、不利な立場にあるスティーヴン王の家臣であるバロンたちが、完全な勝利を得ても、次にくる報復を恐れて、戦闘に踏み込めなかったから、言い換えると戦闘の無益さを感じたからである。この戦闘の無益さの考えは、有利な立場にあるアンジュー伯アンリ=プランタジネットの家臣であるバロンたちも同感であった⁶⁷⁾。

65) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 250.

66) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 250.

67) Josephine Ross, *Kings & Queens of Britain*, *op. cit.*, p. 19.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 250.

68) Nicholas Hooper & Matthew Bennett, *Cambridge Illustrated Atlas of Warfare*, *op. cit.*, p. 50.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

両軍の有力なバロンたちの考えが一致し、この戦闘は、一時休戦となった⁶⁸⁾。

この休戦状態の間、1153年8月17日、ブロア家、ノルマン王家の将来を託されたウスタシュ4世が、急死してしまった。

息子ウスタシュ4世の死によって、ステイーヴン王は、イングランドの王位継承を巡って、戦争を続ける意味がなくなった。ただ自己の身の安全と地位確保だけを、考えればよくなった⁶⁹⁾。

すなわち、ウスタシュ4世の死によって、ステイーヴン王は、ブロア家、およびノルマン王家の王位継承を、断念せざるを得なくなったのである。

そこで、この戦争状態を終わらせるために、カンタベリー大司教テオバルドゥスが尽力し、両者が、対峙したウォリングフォードで、和平のための会談をすることになった⁷⁰⁾。

そのウォリングフォードの和平会談で、平和を構築するための原案条約が、作成されることになった⁷¹⁾。

カンタベリー大司教テオバルドゥスが、実際に和平会談の内容を、ウォリングフォード条約 (The Treaty of Wallingford) へと進め、そして、その作業をサポートしたのは、ステイーヴン王の実弟、ウィンチェスター司教ヘンリーであった。

戦闘意欲が無くなったステイーヴン王は、自己の身の安全と、王としてのプライドだけを考慮して、この和平会談に臨んだ。

その結果、1153年11月6日、両者がウィンチェスターで会い、和平条約であるウォリングフォード条約に多少手を加え、そして、このウォリングフォード条約が、ウィンチェスター条約 (The Treaty of Winchester) として、調印された⁷²⁾。

その後、このウィンチェスター条約は、1153年12月、ウェストミンスター

69) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 251.

70) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 165.

71) Cf. A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 165, n. 2.

72) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *ibid.*, p. 165.

において承認され、ウェストミンスター条約 (The Treaty of Westminster) として、すなわちスティーヴン王の憲章として、発布された。⁷³⁾

このウィンチェスター条約の主内容は、以下のようにまとめられる⁷⁴⁾。

・ノルマンディー公であるアンジュー伯アンリ＝プランタジネットを、イングランドの王位継承者として制定し、私の法定相続人として認め、彼にイングランド王国を与え、それを承認する。

・私が与えた名誉、贈与、承認に対して、アンジュー伯アンリ＝プランタジネットは、私に臣従の礼をつくし、宣誓によって、私に保証を与えなければならない。

・アンジュー伯アンリ＝プランタジネットは、次のことを、誓約しなければならない。すなわち、私の家臣となり、あらゆる種類の権力を使い、私の生命と名誉とを、守らなければならない、ということである。

・私は、ノルマンディー公であるアンジュー伯アンリ＝プランタジネットの保証人として、次のことを、宣誓する。すなわち、私は、あらゆる種類の権力を使い、彼の生命と名誉とを守り、また、彼を、私の息子として、すべての物の相続人として、扶養し、さらに、あらゆる人に対し、彼を守ることができる、すべてのこととする、ということである。

・私の息子ウィリアムは、ノルマンディー公であるアンジュー伯アンリ＝プランタジネットに臣従の礼をつくし、その代りに彼から、イングランド国内の生活権、所有権、相続権を、保証されること。

・ヘンリー1世以後に築城された無許可、あるいは‘不法’の城郭は、すべて取り壊されること⁷⁵⁾。

・王のフランドル外国人傭兵たち (Flemish mercenaries) は、帰国すること、また、秩序は、国中で確立されること、すなわち王がすべての権利を回復させ、

73) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, Second Edition, Reprinted of 1953, ed., Routledge, 1981, p. 436.

・ A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 165.

74) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 437.

75) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 252.

・ A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 166.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

内乱中に奪われた権利を再開させること⁷⁶⁾。

この1153年11月6日の和平条約であるウィンチェスター条約により、アンジュー伯アンリ＝プラントジネットは、スティーヴン王の養子になり、スティーヴン王は、生きていた間、イングランド王であり、その後は、アンジュー伯アンリ＝プラントジネットが、イングランド王位を継承することになった。また、スティーヴン王の息子、ウィリアムは、王位継承を断念することにより、今までの生活権を保証されることになった。

このウィンチェスター条約により、イングランド王国内の内乱は、終結した。

その後、1154年10月頃、法官トマス＝ベケットは、カンタベリー大司教テオバルドゥスから、助祭、首席助祭に任命された。

ちょうど同じ頃、1154年10月25日、スティーヴン王がカンタベリーで、赤痢、胃腸障害、痔疾に罹り、亡くなった⁷⁷⁾。

スティーヴン王の死により、アンジュー伯アンリ＝プラントジネットは、ウィンチェスター条約とおり、1154年12月19日、ウェストミンスター＝アベイで戴冠式を挙げ、イングランド王ヘンリー2世となった。

IV トマス＝ベケット

アンジュー伯アンリ＝プラントジネットは、1154年10月25日のスティーヴン王の死後、カンタベリー大司教テオバルドゥスの労によるウィンチェスター条約により、何の反対もなく、1154年12月19日（日曜日）、ウェストミンスター＝アベイ（Westminster Abbey）戴冠式を終え、21歳で、イングランド王ヘンリー2世になった⁷⁸⁾。

この時点で、ヘンリー2世は、イングランド王であり、また、母エムプレス＝モードから受け継いだノルマンディー公爵領、父アンジュー伯ジョフロワ＝プラントジネットから受け継いだアンジュー伯爵領、メース (Maine) 伯爵領、

76) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 252.

77) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, Reprinted of 1976, ed., Marshall Cavendish Books, 1994, p. 38.

78) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 259.

トゥレーヌ伯爵領、妻アリエノール＝ダキテーヌとの結婚から得たアキテーヌ公爵領の支配者になった。

フランス王ルイ7世よりも広大な領地を支配するヘンリー2世は、ヨーロッパ北西で、海上権を含む、最大の権力者になった。

だが、同じブリテン島内のスコットランド、ウェールズは、支配されていないく、また、アイルランド、およびフランス領土のブルターニュ (Brittany) は、他国であった。

イングランドの新王になったヘンリー2世は、先ず初めに、イングランド国内の平和と、強力な政府を確立させなければならなかった⁷⁹⁾。

つまり、ヘンリー2世は、ステイーヴン王時代の悪政を取り除き、司法を改変させ、力強い政府を樹立させ、イングランド国内の秩序、治安を回復させなければならなかったのである⁸⁰⁾。

この力強い政府を樹立させるために、ヘンリー2世は、ステイーヴン王のような柔弱な王ではなく、ヘンリー1世のような精神的に力強い王になり、封建制度を、再度確立させなければならなかった⁸¹⁾。

また、ヘンリー2世は、その力強い政府を樹立させるための最初のサポートを、カンタベリー大司教テオバルドゥスに頼んだ。

ヘンリー2世は、力強い王になるための素質として、能力的、肉体的、体力的に恵まれていた。

例えば、ヘンリー2世は、決してハンサムではなかったが、彼の能力的、身体的特徴として、背は平均的高さで、怒り肩の丈夫な骨組、四角い分厚い胸、ボクサーを彷彿させる腕、頭の回転は速くてシャープ、怒った時稲妻の閃光のような鋭い灰色の目をしていた⁸²⁾。

また、ヘンリー2世の欠点は、突然かっとなり、頭に血が上り、ライオンの

79) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 256.

80) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 301.

81) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 256.

82) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 255.

83) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 255.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

ような顔になることであった⁸³⁾。

ヘンリー2世は、力強い政府樹立のため、政府で1番重要な司法を、リチャード＝ドゥ＝ルーシー (Richard de Lucy) に託すことにし、彼を、最高法官に任命した。

リチャード＝ドゥ＝ルーシーは、公的な指示なく、たった1人で、ヘンリー2世の戴冠憲章に、サインした人物で、ヘンリー2世が、政府内に、1番最初に任用した人物であった⁸⁴⁾。

その任用の2～3日以内に、レスター伯ロバート＝ドゥ＝ボーモン (Robert de Beaumont) も、リチャード＝ドゥ＝ルーシーと同じような、司法長官の役目を与えた⁸⁵⁾。

さらに、ヘンリー2世は、王室財政を立て直すため、ソールズベリー司教ロジャー (ヘンリー1世治世時、大司法官、またスティーヴン王治世時、王が国政に悪影響を及ぼしているとして、王に反旗を翻し、1136年6月に逮捕) の甥、イーリー司教ナイジェル (1140年にスティーヴン王を攻撃するために、司教管区内で内乱を企てたリーダー) に、財務大臣 (the exchequer) の職を与えた⁸⁶⁾。

22歳のヘンリー2世を最初にサポートしていた、カンタベリー大司教テオバルドゥスは、王の戴冠時、65歳になっていた。

その後、カンタベリー大司教テオバルドゥスは、数カ月で、ヘンリー2世のサポート役が激務となり、体力的に無理が生じ始めたため、1155年に、王のサポート役を、エネルギーな首席助祭トマス＝ベケットに変わることにした。

カンタベリー大司教テオバルドゥスにとって、カンタベリー大聖堂での大司教としての恒常業務があり、その業務以外に、行動的なヘンリー2世の要求、相談があり、テオバルドゥス大司教は、肉体的に限界に来ていた。

ヘンリー2世は、戴冠後、3カ月たたない内に、1155年3月頃、37歳の首席助祭トマス＝ベケットを、力強い政府のリーダー、司法の最高責任者、すな

84) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 260.

85) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 260.

86) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 260.

わち大法官 (Chancellor) として叙任した⁸⁷⁾。

1155年当時としては、37歳は、肉体的にも精神的にも、1番血気盛んな時期である。

また、大法官トマス=ベケットも、ヘンリー2世と同様、能力的、肉体的、体力的に恵まれていた。

例えば、ハンサムで、人懐こく、少し曲がった鼻を持ち、背は高く、行動的であり、卓越したスピーチや鋭い思考力に恵まれ、元気良く、最も高い道徳心、すべてに人に対する愛を追求していた⁸⁸⁾。

15歳の年の差にも関わらず、ヘンリー2世と大法官トマス=ベケットとの仲は、急速に深まっていった。ヘンリー2世にとって、大法官トマス=ベケットは、スティーヴン王の法的長男、ウスタシュ4世の王位継承を拒否させた人物であり、大法官トマス=ベケットに、恩義があった。

ヘンリー2世は、イングランド王戴冠後、1年間の中に、大法官トマス=ベケットのサポートを受け、ロンドンの大諮問会 (great council) を、たびたび開催させた。すなわち、9カ月間の間に、4回開催させた⁸⁹⁾。

この大諮問会で討議されたことは、当然、ヘンリー2世の王としての地位の安定、そして勢力拡大のため、王領地の回復、奪われていた城郭の取戻しであった。

この大諮問会で討議、決定されたなかに、勢力拡大による、アイルランドの植民地化があった。

力強い政府の骨格が決まったことにより、ヘンリー2世は、勢力拡大のため、アイルランド侵攻を決定し、ローマ教皇ハドリアヌス4世 (Hadrianus IV, 在位1154-59) に、1155年、アイルランド侵攻の許可を得た⁹⁰⁾。

87) · George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 260.

· Cf. Philip W. Goetz, Editor-in-Chief, *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 31.

88) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 751.

89) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 261.

90) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 262-3.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

ヘンリー2世が、自己の地位を安定させるために、実際に軍事行動に出たのは、1156年1月初めである。

その軍事行動とは、フランスのブルターニュでの支配権の確立、拡大、つまりブルターニュの獲得であった。

具体的には、アンジューとメーンの統治権を要求している、反抗的な弟、ジョフロワを、鎮圧することであった⁹¹⁾。

なお、この反抗的な弟ジョフロワは、1158年に亡くなった。

また、1157年に、ヘンリー2世は、フランスでの地位を、より安全にさせるために、軍資金確保のための“スキューテイッジ (Scutage：軍役免除金)”を、創設した⁹²⁾。

ヘンリー2世が戦争するときは、彼の封建的家臣であるバロン、アールたちは、必ず、彼に対し、封建的軍事奉仕である軍役を果たさなければならなかった。

だが、何かの理由で、その封建的軍役を果たせないバロン、アールがいる。封建的義務違反が生じた時、ヘンリー2世は、そのバロン、アールに対して、封建的軍役に代わるものとして、言い換えると封建的軍役を免除させる代わりに、貨幣を、強制的に徴収する。

その強制的に徴収された貨幣は、外国の兵士、つまり外国の傭兵ナイトを雇うのに使われる。

その強制的に徴収された貨幣が、スキューテイッジである。

スキューテイッジとは、封建的軍事奉仕ができないイングランドのバロン、アールに対して、封建的軍役を免除させるために徴収されるお金であり、また、そのお金でもって、フランスで戦う傭兵ナイトを、雇用するために使用されるお金である。

このスキューテイッジが創設背景には、ヘンリー2世が、度重なる戦争において、自己の家臣だけで戦うのには無理が生じ、外国の傭兵ナイトを雇い入れ、軍事力を強化する必要があったからである。

91) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 264-5.

92) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 265.

逆に、バロン、アール側にとって、このスキューテイッジは、多少歓迎された。

というのは、封建的軍役免除が、簡単な貨幣の支払いで済み、また戦争にて、自らの家臣である封建的ナイトたちが、傷つかなくても済むからである。

さらに、ヘンリー2世は、大法官トマス＝ベケットのアドバイスを受け、ステイーヴン王以来、アール、バロン、ナイトたちに奪われていた、イングランドでの王領地を取り戻した。

例えば、ステイーヴン王時代に奪われたノーフォーク州 (Norfolk) を、ノーフォーク伯ヒュー＝ビガット (Hugh Bigot, Earl of Norfolk) から、1157年に取り戻した⁹³⁾。

特に、1139年4月、スタンダード戦の和平条約で、ハンティングダン伯 (Earl of Huntingdon: スコットランド王デイヴィッド1世の息子) に奪われた、イングランド北部ノーサンバーランド (Northumberland)、ただし、そのうちのニューカッスル (Newcastle)、バンボロー (Bamborough) を除いた領地をも、1157年に取り戻した⁹⁴⁾。

また、同年1157年に、ウェールズで一揆が勃発した。

これに対処するために、1158年夏、ヘンリー2世は、ノルマンディーから海峡を渡り、イングランドに入った。そして、このウェールズの一揆を制圧した⁹⁵⁾。

ヘンリー2世は、更なる地位安定のため、すなわちより多くの城郭、王領地の回復させるため、1153年11月6日のウィンチェスター条約の履行により、反抗的なバロンに対して、郊外に無許可で建造された1,000もの城郭を取り壊した⁹⁶⁾。

この反抗的な城郭の取り壊しによって、ヘンリー2世は、王領地の回復と拡大を目指して、王権の安定化を図った。

さらに、1158年、ヘンリー2世は、アキテーヌの女子相続人である、妻アリ

93) ・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 260, and, p. 266.

94) ・Andrew Lang, *A History of Scotland from the Roman Occupation*, Vol. 1, Reprinted of 1903, ed., New York: Ams Press, Inc., 1970, p.107.

・Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 266.

95) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 267.

96) Allen Andrews, *Kings & Queens of England & Scotland*, *op. cit.*, p. 42.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

エノー＝ダキテーヌが宗主権を持つトゥールーズ (Toulouse) を、実質的に獲得したいと考えた。

だが、このことに感づき、この地の減少に危機感を持ったフランス王ルイ7世が、すでに軍事的用意をして、トゥールーズに入っていた。

ヘンリー2世と、ルイ7世との関係は、ますます非常に気まずい関係になった。

ヘンリー2世が、アリエノー＝ダキテーヌと結婚して以来、ヘンリー2世とルイ7世との関係は、完全に冷え切っていた。

というのは、ヘンリー2世の妻、アリエノー＝ダキテーヌの元夫が、ルイ7世であり、そのアリエノー＝ダキテーヌを、ヘンリー2世が、不倫の末、ルイ7世から奪い取ったからである。

このことに対して、ルイ7世は、腹癒せのため、過去1152年7月に、ヘンリー2世 (当時アンジュー伯アンリ＝プランタジネット) を攻撃するため、ノルマンディーに侵入していた。

この両国の関係修復を託されたのが、大法官トマス＝ベケットであった。

大法官トマス＝ベケットは、外交手腕を発揮し、1158年中頃、両国の関係修復、すなわちヘンリー2世の息子、ヤング＝ヘンリー (the young Henry) と、ルイ7世の娘マーガレット (Margaret) との結納を、執り行った⁹⁷⁾。

この結納が、両国の関係を、多少良い方向にもたらししたが、1159年、軍事的に優位に立っていたヘンリー2世は、妻アリエノー＝ダキテーヌが宗主権を持つトゥールーズを、武力で獲得することにした。

そこで、聖職者であり、武人でもある、大法官トマス＝ベケットは、1159年6月、ヘンリー2世に代わり、封建的大領主トゥールーズ (Toulouse) 伯を支配下に置くため、フィールドにおいて、最も優秀で、最高の武装をした団体に組織された、自らの直属ナイト700名を引き連れ、フランスに渡り、侵攻した⁹⁸⁾。

だが、トゥールーズに駐留している、ルイ7世率いるフランス軍は、かなりの規模に達していた。

97) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 267.

98) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 269.

これら両軍が衝突すると、かなりの犠牲者が出る。

多くの犠牲者を出さないために、ヘンリー2世は、宗主権の及ぶトゥールーズと、衝突を避けなければならないと、考えた。

それ故、ヘンリー2世は、トゥールーズ伯と同盟を結ぶことにした。

同盟を結ぶということは、ヘンリー2世に対して、封建的大領主トゥールーズ伯に、軍役免除金であるスキューテイッジを、支払わせる、ということであった⁹⁹⁾。

また、同盟の一環として、その翌年1160年に、ヤング＝ヘンリーと、マーガレットとは、結婚した¹⁰⁰⁾。

このことにより、ヘンリー2世は、トゥールーズを、支配下に置くことができた。

1161年4月18日、カンタベリー大司教テオバルドゥスが、逝去した¹⁰¹⁾。

カンタベリーの大司教座が空位になると、ヘンリー2世は、大法官トマス＝ベケットに、その職を要請した。

というのは、ヘンリー2世が、今まで、イングランド国内の秩序が順調に回復し、また、1伯領アンジューが帝国になれたのは、すべて大法官トマス＝ベケットのサポートがあったことを、熟知していたからである。

そこで、それ以上のイングランド国内の秩序回復、領土拡大を目指して、ヘンリー2世は、大法官トマス＝ベケットのカンタベリー大司教への就任を、強く望んだ。

言い換えると、ヘンリー2世は、カンタベリー大司教トマス＝ベケットと共に、イングランド国内を、平穏無事に統治しようとしたのである。

また、生前、カンタベリー大司教テオバルドゥスも、大法官トマス＝ベケットが、カンタベリー大司教になることを望んでいた¹⁰²⁾。

だが、大法官トマス＝ベケットは、初めのうち、ヘンリー2世の要請に、躊

99) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 270.

100) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 271.

101) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 272.

102) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 272.

躊躇していた。

というのは、大法官トマス＝ベケット自身が、神に仕える敬虔深い聖職者であったからである。

言い換えると、大法官トマス＝ベケットが、今まで、聖職者として、武人として、ヘンリー2世をサポートしてきたのだが、カンタベリー大司教になると、武人としての立場が取れなくなり、聖職者として立場のみしか、取れなくなると考えたからである。

具体的には、大法官トマス＝ベケットが、厳格な教会人としての立場をとるために、もしヘンリー2世が、教会に介入しようとしたならば、必ず衝突が起これると、判断したからである¹⁰³⁾。

この大法官トマス＝ベケットの判断は、正しかった。

というのは、実際に、ヘンリー2世が教会に介入して、教会を掌握しようとしていたからである。

大法官トマス＝ベケットが躊躇していたにも関わらず、ヘンリー2世は、強引に、1162年6月3日(日曜日)、大法官トマス＝ベケットを、カンタベリー大司教に、叙任した¹⁰⁴⁾。

言い換えると、厳格な教会人としてのみの立場をとりたい大法官トマス＝ベケットは、自分の意志とは異なり、ヘンリー2世の強い要請に押し切られ、現職の司法の最高職である大法官を兼務するかたちで、カンタベリー大司教になることを、承諾した。

だが、カンタベリー大司教になったトマス＝ベケットは、叙任された時から、ヘンリー2世と、見解を異にした。

すなわち、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、大司教になった時から、贅沢生活をして、教会人たる禁欲生活に入っていっただのである。

例えば、身に袋地の粗服を纏い、ブレッドと、美味しくないとハーブを混ぜた

103) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 272-3.

104) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 274.

ことによって、さらに美味しくなくなった水との粗食を、取っていた。

また、毎日、敬虔なキリスト教徒になり、跪き、お祈りをし、13人の乞食の足を洗ってあげて、プレゼントを与え、帰っていた¹⁰⁵⁾。

ヘンリー2世の意図するところから、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、変わっていった。

ヘンリー2世は、国政をスムーズに進めるため、教会トップである、大法官トマス=ベケットを、カンタベリー大司教にさせたのであるが、一旦カンタベリー大司教となるや否や、トマス=ベケットは、明確に教会人の立場をとり、国政に非協力的になっていった。

言い換えると、カンタベリー大司教になったトマス=ベケットは、ヘンリー2世と距離を置き、ローマ教皇に、忠誠を誓い、教会の発展、勢力拡大に、尽力し出したのである。

1163年1月、ヘンリー2世は、ノルマンディーの長い滞在の後、イングランドに戻って来た¹⁰⁶⁾。

この時、イングランドでは、聖職者は、司法権を持つ、行政長官と、同じ地位にあった。

そして、ヘンリー2世の役人は、王に対して、王の即位後、聖職者が、100人以上の殺人者たちを、教会裁判所で審理し、甘い判決で、彼らを保護している、と報告した¹⁰⁷⁾。

これに対して、ヘンリー2世は、自己の司法権を絶対化させるために、教会裁判所よりも、上位にくるような裁判所、すなわち王室裁判所の創設を考えた。

この考えにより、ヘンリー2世と、カンタベリー大司教トマス=ベケットとの考え方が、決定的に、異なり始めていった。

その1例として、1163年1月末、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、教会人としての立場を明確にするため、兼務していた、現職の司法の最高職で

105) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 309-10.

106) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 202.

107) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, pp. 312-3.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

ある大法官の職を辞した¹⁰⁸⁾。

このことにより、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、イングランド政府の行政から一切手を引き、教会人としてのみ、生きることとなった。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットに対する、ヘンリー2世の目論みは、外れた。

さらに、ヘンリー2世にとって思いも寄らぬことが、1163年7月に起こった。

それは、ヘンリー2世がウッドストック (Woodstock) の大諮問会 (great council) で、国家の収入を増やすために、課税を提案したところ、カンタベリー大司教トマス＝ベケットが反対した、ことである¹⁰⁹⁾。

その課税とは、シェリフ＝エイド (sheriff's aid : 州長官のための援助金) と呼ばれる援助金であり、州長官のサービスの代償として、1ハイドから2シリング徴収した¹¹⁰⁾。

この徴収されたシェリフ＝エイドは、当然、王室財務省の金庫に入る。

このシェリフ＝エイドは、カンタベリー大司教トマス＝ベケット1人を除いて、すべての聖職者から賛成された。

だが、カンタベリー大司教トマス＝ベケット1人の反対により、このシェリフ＝エイド案は、可決されなかった。

ウィリアム1世征服王 (William I, the Conqueror, 1066-1087) 以来、イングランドでは、教会裁判所が、聖職者の上に、絶対的司法権を持つという、司法権を創設していた。そして、ウィリアム1世は、その教会裁判所を利用して、イングランド全体の権力を、集中させた。

だが、ヘンリー1世 (Henry I, Beauclerc, 1100-1135) 治世時になると、ヘンリー1世が、司法制度の改革により、教会裁判所の権限が、多少低下させ、国王と教会との良い関係、すなわち良い慣習、を保った。

この良い慣習は、後の「古い慣習法 (ancient customs)」、さらにイングラ

108) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 276-7.

109) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 277-8.

110) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 202.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 277.

ンドの「コモン＝ロー (the common law)」素地になった。

ブロアのステイーヴン王 (Stephen de Blois, 1135-1154) 治世時になると、ステイーヴン王の権限を無視して、教会裁判所の権限を、不法にも、拡大させた。

このような国王と教会との歴史の変遷を考慮して、ヘンリー 2 世は、1143 年に、トマス＝ベケットが、大陸で学んだローマ法 (イタリアのボローニャ大学、Bologna) と、教会法 (フランスのオセール大学、Auxerre) とを、さらに自分にとって良い意味で、取り入れ、かつイングランドの教会裁判所を、ウィリアム 1 世征服王時のような正常化に戻したいと考えた¹¹¹⁾。

具体的には、ヘンリー 2 世は、祖父ヘンリー 1 世時のような、国王と教会との良い関係を築きたい、「古い慣習法 (ancient customs)」を取り入れたい、と考えた¹¹²⁾。

ローマ法や教会法によると、ローマ教皇の方が、ヘンリー 2 世よりも上位に来ていて、裁判権で不服が生じた場合、最終的に、ローマ教皇に、上訴できることになっていた。

だが、イングランドでの裁判権を統一したいヘンリー 2 世にとっては、このローマ法と教会法が、障害であった。

このようなイングランドの状況下であったので、ヘンリー 2 世は、カンタベリー大司教トマス＝ベケットが反対したシェリフ＝エイドの可決を、諦めざるを得なかった。

また、裁判権に関して、ヘンリー 2 世は、罪を犯した聖職者が、教会裁判所において、その職を解かれただけで、それ以上の罪には問われなかったことに對し、憤りを感じていた¹¹³⁾。

言い換えると、裁判権において、一般の王室裁判所に比べて、余りにも量刑が軽い教会裁判所に対して、ヘンリー 2 世は、憤りを感じていたのである。

111) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 279.

112) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, Reprinted of 1990, ed., Cathedral Enterprises Ltd., 2001, p. 10.

• David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 766.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

そこで、ヘンリー2世は、罪を犯した聖職者は、先ず初めに、教会裁判所で、司教により、その職を解かれ、再度、王室裁判所で、普通の裁判官によって、判決を下したいと、考えた。

また、言い換えると、裁判権に対するヘンリー2世の目的は、とにかく教会裁判所の権限を弱め、王室裁判所の権限を強めたい、ということであった。

この実現のため、ヘンリー2世は、シェリフ＝エイドが反対された3カ月後の1163年10月1日に、ウェストミンスター（Westminster）で、会議を招集した。

ヘンリー2世に招集された司教たちは、後のクラレンドン法（Constitutions of Clarendon）となるべき、本質的には同じような内容に、同意するように、提言された¹¹⁴⁾。

その内容とは、聖職者が、有罪か無罪かということ、教会裁判所で決定される場合、もし有罪と判決されたならば、その聖職者は、聖職を剥奪され、俗人となり、俗人裁判所に、送られる、ということである¹¹⁵⁾。

言い換えると、罪を犯した聖職者は、まず初めに、教会裁判所で、有罪の判決を受け、その職を解かれ、俗人となり、その次に、国王裁判所で、審理され、判決を受けるということである¹¹⁶⁾。

当時、ローマ教皇、すなわちローマ法王は、どんな国王よりも、優位な立場にあった。

ローマ法王は、国王に対し、破門権を持ち、破門された国王は、ただの権力なしの俗人となる。

113)・ Cf. A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, pp. 202-3.

・ Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 278-9.

114) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, pp. 280-281.

115)・ Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.125.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 281.

116) Cyril E. Robinson, *England*, *op. cit.*, p. 72.

破門されたくない国王は、ローマ法王の意思に従わなければならない。

当然、ヘンリー2世にも同じことが言え、ローマ法王に、逆らえない。

そこで、ヘンリー2世は、自分の意思で、国政をスムーズに進めるためには、どうしてもこの教会の力、ローマ法王の代理である、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの存在が、足枷となる。

この足枷を取り除くためには、ヘンリー2世は、教会に介入し、掌握しなければならない。

そこで、ヘンリー2世が考えたことは、当然の如く、教会裁判所を弱体化であった。

このためには、1163年10月1日に行われた、ウェストミンスター会議での提言の立法化であった。

この実現化のため、ヘンリー2世は、1164年1月末に、大諮問会 (great council) を、クラレンドン (Clarendon) で、招集した¹¹⁷⁾。

そのクラレンドの大諮問会議に、ヘンリー2世は、ウェストミンスター会議での提言を、さらに議論、修正させた、16カ条のから成るクラレンドン法 (Constitutions of Clarendon) を、司教に提出した。

16カ条から成るラレンドン法を、下記に挙げてみる¹¹⁸⁾。

1. もし、俗人たち、俗人と聖職者、聖職者たちの間で、教会の土地、およびその土地の贈与に関する問題が起こったならば、その問題は、王室法廷で取り扱われ、結論が出されなければならない。
2. 支配者王の封土内の教会は、王の同意、許可なしには、永久に認可されない。
3. ある問題について、王の裁判官によって起訴、告発された聖職者は、その問題を答えるために、王室裁判所に、また教会裁判所に、来なければならない。しかし、王の裁判官は、その問題が、どのようなものなのかを見るために、聖職者を、神聖な教会法廷に、送られなければならない。もし、その聖

117) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 282.

118) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, pp. 767-70.

職者が、有罪、あるいは罪を認めたならば、教会は、もはやその聖職者を、庇ってはいけない。

4. 王国内の大司教、司教、聖職者が、支配者王の許可なしに、王国から出ることは、法律上認められない。それでも、もし彼らが、安全に王国から出るならば、また支配者王に許可されたとしても、出発や、滞在や、到着の際、何か事故があった時、王や王国に対して、悪意を抱いてはいけないし、損害を求めてはいけない。
5. 破門された人は、その後、良い行動をしても、忠誠の誓いをを行ったとしても、安全の保障を与えるべきではない。だが、赦免を得るため、教会の判断に従うならば、十分な安全の保障を与えるべきである。
6. 俗人は、司教の前で、信任を得た法定告発人や、証人によって、命を危険な状態に晒されるべきではない。それゆえ、そのような考え方において、首席助祭は、俗人の権利を失効させないし、俗人に何かを強制させもない。もし、告発された人たちが、意図的に、また敢えて訴えられたものでなかったならば、司教によって要請された州長官は、近隣、あるいは都会から集めた12人の法律家に、最善の知識を持って、問題の真実を明らかにするということを、司教の前で、誓わせるべきである。
7. 最高の王を抱えている人は誰も、また王の領地を管理している役人は誰も、破門されるべきではない。彼らの内の誰かの土地も、もし、その妥当性が、初めに支配者王によってなされていなかったならば、禁止の状態に置かれるべきではない。王室裁判所に関係する問題は、そこで解決され、教会裁判所に関係する問題は、さらに送られ、処理される、という方法において、もし、支配者王が、国内にいるならば、上級裁判官によって行われ、もし、支配者王が海外にいたならば、その権利は、支配者王によって、行使される。
8. 訴訟に関して、もし訴訟が起こったならば、訴訟は、首席助祭から司教へ、また司教から大司教へと進むであろう。もし、首席助祭が、裁判で、判決できなければ、その未判決は、王の命令によって、その争議が大司教法廷で裁かれるため、またその争議が、王の同意なしには先に進められなく、最終的

に、支配者王に、持ち込まなければならない。

9. 聖職者が、自由な土地保有権として、反対に俗人が、封建的土地保有権として望んでいる保有に関して、もし訴訟が、聖職者と俗人、あるいは俗人と聖職者との間で、起こったならば、その訴訟は、審議を通して、12人の法律家の認識によって、結審される。また、その審議は、王の裁判長の面前で、自由な土地保有権か、あるいは封建的土地保有権かに関する、保有について行われる。彼らの双方が、同じ司教やバロンでないクレームに限り、もし、その保有が、自由な土地保有権に属すると判断されたならば、抗弁は、教会裁判所で、審問される。だが、もし封建的土地保有権と判断されたならば、抗弁は、王室裁判所で、審問される。だが、もし彼らの各々が、同じ司教やバロンに対して、この封建的封土に関して訴えるならば、その問題が抗弁によって、解決されるまで、初めに保有していた人が、確認されるまで、保有を失わないような方法において、王室裁判所で、審問されなければならない。
10. もし、支配者王の都市、城郭、自治区、王室荘園の誰か1人が、首席助祭や司教によって、答えなければならない、また召喚で償いを拒否する、罪によって召喚されたならば、彼を、政務禁止状態に置くことが適切である。しかし、彼は、都会にいる支配者王の主要な役人によって、その妥当性が、実証されるまで、また義務の履行のため、裁判所に来るよう宣告されるまで、召喚されるべきではない。しかし、もし王の役人が、そのようなことができなければ、その役人は、自分の命を、支配者王に、委ねる。そして、その後、司教は、教会裁判所によって、被告人を、強制することができる。
11. 最高の王に仕える王国内の大司教、司教、すべての聖職禄付きの聖職者は、バロンの地位として、支配者王から、自分たちの保有地を得ているし、また、王の裁判官や大臣に対して、自分たちの保有地を得ているため、答える責任がある。彼らは、すべての公的権利や慣習を、遵守するし、遂行する。また、他のバロンと同じように、彼らは、四肢の切断、死刑という判決事例が出るまで、バロンと一緒にいて、それを、王室裁判所の判決として、提出しなければならない。

12. 大聖堂、および王領地の修道院で、大司教の職、司教の職が空位になった時、その空位の職は、王の手に委ねられなければならない。そして、王は、王領地の1部として、すべての収入と収益とを、受け取る。そして、教会の準備をすることになった時、支配者王は、教会のより重要な聖職禄付きの聖職者を、呼び出さなければならない。そして、選挙が、支配者王の同意でもって、また、この目的のため呼び出された聖職者たちのアドバイスでもって、彼自身の教会で、行わなければならない。そして、聖職者は、奉獻する前に、命令を生かし、自分の生命と身体、現実の名誉のため、自分の君主として、支配者王に対し、その教会で、臣従の礼と忠誠と誓い、選挙で選ばれるべきである。
13. もし、王国内の貴族のうち、ある誰かが、彼自身、人びとに対して、大司教、司教、首席助祭の裁判を、不法に妨げたならば、支配者王は、彼を、裁判所に、出廷させなければならない。そして、もし偶然に、誰かが、自分の権利を、支配者王に、不法に奪われたならば、大司教、司教、首席助祭は、彼を裁判に出廷させ、その結果、彼に、罪を償わせなければならない。
14. 王に没収された人びとの家財は、国王の裁判所に反抗して、教会あるいは教会外の墓地に、留めてはいけぬ。というのは、その家財が、教会の内外で見つかるかどうか、関係なしに、その家財が、王に属しているからである。
15. 当然、誓わなければならない、あるいは誓わない負債の嘆願は、王の裁判所の中に、あるべきである。
16. 農奴の息子は、出生を良く知っている支配者の同意なしに、聖職に、任命されるべきではない。

ヘンリー2世が、このようなクラレンドン法を、司教たちに提出した背景には、当然、教会裁判所が、「重罪を犯した聖職者」に対し、甘い判決を下し、治世を乱していると、判断したてからであった。

治世の指揮命令系統を、1歩でも自分の意思に沿わずために、ヘンリー2世は、教会裁判所の判決よりも、国王裁判所の判決の方が上位にあるとする「古い慣習法」を、持ち出し、司教たちに、同意を求めた¹¹⁹⁾。

だが、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、この16カ条から成るクラレンドン法に、反対した。

その反対理由は、この条項の中の第3条が、「重罪を犯した聖職者」の取り扱い方に、異議があったからである。

その異議の具体的内容は、次のことによる。

「重罪を犯した聖職者」が、世俗の裁判所で告発され、その審理のため宗教裁判所に連れて来られ、もしその宗教裁判所の判決で、有罪と宣告されたならば、その聖職者は、聖職を剥奪され、俗人となり、再び、世俗裁判所に送られ、その世俗裁判所で、判決を受け、処罰を受けなければならない¹²⁰⁾、ということである。

このクラレンドン法において、すなわち重罪を犯した聖職者を、教会裁判所の審理の後、再度、王室裁判所で審理し、刑罰を与える、ということに対して、これは、ヘンリー2世による教会裁判所の介入であり、教会裁判所の弱体化にあたるとして、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、猛反対したのである。

ここで、このクラレンドン法について、1つ注意しなければならないことがある。

それは、ヘンリー2世が、飽く迄も、「世俗裁判所が、聖職者を裁く」ということを、言っていないことである。

また、ヘンリー2世は、この「世俗裁判所が、聖職者を裁く」ことを、クラレンドン法の条項の中にも、謳っていない

すなわち、ヘンリー2世は、このクラレンドン法において、重罪を犯した聖職者に対し、ある程度、宗教裁判所にも、権限を持たせるが、最終的には、王の管轄下にある世俗裁判所が、判決を下すということである。

ヘンリー2世の考え方は、国王としての考え方であり、王権の強化にすぎなかった。

これに対して、敬虔なカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、教会の立場

119) A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 203.

120) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 283.

を擁護せねばならず、そこで、相反する「古い慣習法」を基にした、このクラレンドン法に反対した。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットの反対の主旨は、1つの罪で2つの裁判、2つの刑罰を、受けるべきではない、ということである¹²¹⁾。

すなわち、1つの罪で2度裁かれるべきではない、また、罪を犯した被疑者は、2重の危険 (double jeopardy) に晒すべきではない、という考え方であった。

なお、この罪を犯した被疑者は、2重の危険 (double jeopardy) に晒すべきではない、という考え方は、後のアメリカ合衆国の憲法、修正第5条の原案になっている。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットが反対しているにも関わらず、ヘンリー2世は、強引に、このクラレンドン法の立法化に、力を注いだ。

その背景には、やはり、「重罪を犯した聖職者への、宗教裁判所の量刑が、世俗裁判所のそれに比べて、あまりにも軽い」ということを、ヘンリー2世が、改善させたい、そのためには、「古い慣習法」、すなわちクラレンドン法を、立法化させるしかない、と考えたからである。

このクラレンドン法の中で、ヘンリー2世が、1番言いたかったのは、当然、「重罪を犯した聖職者」を取り扱っている条項である。

1164年1月末、大諮問会 (great council) に提出された、クラレンドン法は、2日間、イングランドの司教たちによって、署名されなかった。

だが、ヘンリー2世の報復を恐れて、司教たちは、この改革案、クラレンドン法に、署名することを、同意した。

また、カンタベリー大司教トマス＝ベケットも、2日間怒り続けた後、司教たちの身の安全を考え、クラレンドン法の主旨に、同意した¹²²⁾。

だが、強気なカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、このクラレンドン法の署名には、きっぱりと、拒否した¹²³⁾。

121) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 283.

・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 206.

122) Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.125.

教会の裁判権を弱めることになるクラレンドン法を、ローマ教皇アレクサンデル3世 (Alexander III, 1159-81) に訴えるために、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、ヘンリー2世の同意なしに、海を渡り、ローマに行くことにした。だが、この計画は、失敗に終わった。

このカンタベリー大司教トマス=ベケットの訴訟手続きに対して、ヘンリー2世は、非常に憤りを感じた。

というのは、ヘンリー2世が、今進めているクラレンドン法の訴訟手続きを、無視したからである。

言い換えると、強気なカンタベリー大司教トマス=ベケットが、クラレンドン法の訴訟手続きを無視して、すなわち、ヘンリー2世の同意なしに、直接、ローマ教皇アレクサンデル3世に訴訟を持ち込もうとしたからである。

このようなカンタベリー大司教トマス=ベケットの背信行為に対して、封建的最高権力者ヘンリー2世は、彼への報復を、考えるようになった。

その報復とは、カンタベリー大司教トマス=ベケットの、これまでの聖職者としての些細なミス、あるいは捏造された臣従の礼の義務違反、公金横領、& c. を見つけ出し、それを、イングランド中の司教、バロン、アールの誰かに告訴させ、刑罰を与える、ということであった。

数カ月後、まず初めにヘンリー2世は、訴訟手続きの無視に対して、カンタベリー大司教トマス=ベケットに、弁明を聞くことにした¹²⁴⁾。

この弁明を聞くために、ヘンリー2世は、1164年10月6日 (火曜日)、カンタベリー大司教トマス=ベケットを、ノーサンプトン城内にあるクリヤ=レギス (the curia regis : 王室法廷) の小法廷に、召喚することにした¹²⁵⁾。

だが、当のヘンリー2世は、鷹狩りをして、遅くノーサンプトンに到着したため、クリヤ=レギスに出席できなかった¹²⁶⁾。

翌日、10月7日 (水曜日)、ノーサンプトン城内で、クリヤ=レギスが開廷

123) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 285.

124) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 285.

125) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 285.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

された。

そこで、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの訴訟手続き違反を、審理するはずであった。だが、当日は、それよりも重い、彼の封建的義務違反を、審理することになった。

クリヤ＝レギスの判決結果は、有罪であり、彼の動産すべて、差し押さえられることになった¹²⁷⁾。

10月8日(木曜日)、ヘンリー2世は、クラレンドン法の条項を1つでも多く実施させるために、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに、クリヤ＝レギスの司法権を、認めるように、強制した。

また、強気なカンタベリー大司教トマス＝ベケットに対して、彼よりも地位的に優位にあるヘンリー2世は、さらに、彼トマス＝ベケット本人を攻撃するために、彼そのものを破滅させようと、考えた¹²⁸⁾。

そのことを、実施するために、ヘンリー2世は、同日の10月8日に、大法官時代に城の所有者として受け取った300ポンドに対して、告訴されたことに対して、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに、答弁を求めた。

300ポンドの公金横領の容疑に対して、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、国家のサービス、すなわちロンドン塔や、城の補修に使った、と答えた¹²⁹⁾。

だが、ヘンリー2世は、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの権力拡大として、この答弁を認めなかった。

10月9日(金曜日)、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、トゥールーズの戦争に関連して、王から500マルクのローン、また王の安全に関して、あるユダヤ人から、他の500マルク借金があるとして、家臣によって審問された¹³⁰⁾。

10月10日(土曜日)、迫害を受けているカンタベリー大司教トマス＝ベケッ

126) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 772.

127) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 286.

128) Cf. George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, pp. 286-7.

129) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, pp. 774-5.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 287.

トに対し、貴族であるウィンチェスター司教ヘンリー (Henry, Bishop of Winchester, 1126-1171) から、アドヴァイスがあった。

そのアドヴァイスとは、2,000マルク提供するから、そのお金を、ヘンリー2世に、返せということであった¹³¹⁾。

だが、ヘンリー2世は、その2,000マルクの返金を、断った。

この時点で、カンタベリー大司教トマス=ベケットに対するヘンリー2世の恨みは、お金ではなく、自分の意思に従わない、トマス=ベケット本人に対する恨みであった。

10月11日(日曜日)、1日中、専門家による審議に入り、審議が熱中しているため、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、一息も吐けなく、宿舎に帰れなかった¹³²⁾。

10月12日(月曜日)、強気なカンタベリー大司教トマス=ベケットは、風邪をひき、肉体的に痛みと倦怠感で、急に弱気になり、全身を震わしながら、クリヤ=レギスから去って行った。

これに対して、ヘンリー2世は、その風は仮病であり、裁判に出廷したくない理由によるものであると感じた。

そこで直ぐに、ヘンリー2世は、裁判での答弁が終わっていないので、すべてのアールと、多くのバロンを、カンタベリー大司教トマス=ベケットを、捕獲するために向かわせた。

その後、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、大法官時代に、架空の教会の収入の提供を、申し出たかどうか、また、そこで、王室裁判所の判断を、守ったかどうか、答弁するために、弁護士によって、身柄を確保された。

そして、カンタベリー大司教トマス=ベケットは、「もし、私の病弱な体が

130) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 775.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 287.

131) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 775.

132) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *ibid.*, p. 776.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

許すならば、次の日、王室裁判所に出席し、自分の義務を果たすであろう¹³³⁾」と答えた。

10月13日(火曜日)、早朝、ヘンリー2世の怒りに怯えていた司教たちは、トマス＝ベケットに、大司教の職を辞し、王に従うように、説得を試みた¹³⁴⁾。

だが、朝のミサを終えたカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、自分の意思を貫くために、説得を拒否した。

そして、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、十字架を握り締め、自らの手でドアを開け、クリヤ＝レギスに入って行った。

クリヤ＝レギスに入ったカンタベリー大司教トマス＝ベケットに対し、司教の数人が、そのような無益な態度を捨て、王に従うように、再度説得を試みた。

だが、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの態度は、変わらなかった。

クリヤ＝レギスで、再び、捏造された王の公金横領と、王への背信行為に対して、再度、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの弁明が求められた¹³⁵⁾。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、神聖な教会の自由と教会資産の不可侵という自分の意思を貫くために、言い換えると教会法を擁護するために、頑固としてクラレンドン法に反対した。

その反対の理由として、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、教会の司法権を除いて、そのクラレンドン法そのものが、神の法律や、教会の威厳に反し、教会の自由が消えつつあるのに、キリスト教王としての忠誠義務が何もない、と指摘した¹³⁶⁾。

クラレンドン法に賛成した聖職者とカンタベリー大司教トマス＝ベケットとの仲は、決定的に決裂した。

今やカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、クリヤ＝レギスの中で、孤立

133) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *ibid.*, p. 776.

134) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 288.

135) Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.125.

136) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 289.

無援となり、身の危険を感じるようになっていた。

自分の身を守るために、また国王に対する封建的不服従で有罪という、結果ありきの審理のため、判決の前に、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、クリヤ＝レギスから退出することにした¹³⁷⁾。

その時、ヘンリー2世の意思に背いた反逆者として、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに罵声が、アールやバロンたちから、浴びせられた。

これに対して、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、もし私が、公金横領と背信行為で、告訴されていなかったならば、激しく、“偽証の反逆者(perjured traitor)”と罵った人びとに対し、腕尽くで、説き伏せたであろう、と心に抱いていた¹³⁸⁾。

だが、聖職者であるカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、静かにクリヤ＝レギスから、退出した。

そして、その10月13日(火曜日)の夜、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、笏杖(シャクジョウ)を携え、密かに、ノーサンプトンを去り、身の危険を避けるために、変装し、海峡沿岸をさ迷い歩いた¹³⁹⁾。

そして、2週間後の1164年11月2日、失望したカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、この状況を、ローマ教皇アレクサンデル3世に訴えるために、フランスのフランドル(Flanders)に、一旦、亡命した¹⁴⁰⁾。

翌日の1164年11月3日、クリヤ＝レギスは、カンタベリー大司教トマス＝ベケットの封土を、ヘンリー2世の手に帰することを、議決した。

そして、ヨーク大司教を筆頭に、ヘンリー2世支持者の聖職たちは、フランス王ルイ7世に、またフランドル伯に、反逆者として王国を逃亡した“前カンタベリー大司教”トマス＝ベケットを、領地内に受け入れるべきではない、と

137) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket, op. cit.*, p. 21.

138) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 290.

139) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 322.

140) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 290.

・Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain, op. cit.*, p.125.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

いう趣旨の手紙を送った¹⁴¹⁾。

フランドルに亡命したカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、南西に移動して、パリの南東約100キロメートルのサンス(Sens)に行った。そのサンスでは、もうすでにローマ教皇アレクサンデル3世が来ていた。

このサンスの地で、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、ローマ教皇アレクサンデル3世から、教会法を擁護する、自分の意志の正当性を得られた¹⁴²⁾。

また、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、ヘンリー2世の宿敵であるルイ7世からの保護を受けられることになった¹⁴³⁾。

さらに、1165年6月、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、ローマ教皇アレクサンデル3世から、「急ぐことなく、落ち込むことなく、あらゆる手段をとって、ヘンリー2世から、教会に自由を回復させなさい。」という旨の手紙を受け取った¹⁴⁴⁾。

その後、1165年11月に、ローマ教皇アレクサンデル3世は、ローマに帰った¹⁴⁵⁾。

フランスでの安全性が確保できたことにより、また、自分の意志の正当性が、ローマ教皇アレクサンデル3世によって認められたことによってカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、ヘンリー2世、および彼の支持者に対して、反撃に出ることにした。

1166年5月、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、逃亡先のフランス、パリ南東部約200キロメートルのヴェズレー(Vézelay)から、ヘンリー2世に対して、ヘンリー2世を含めて、7人の王支持者の破門状を送りつけ、そして、6月12日、ヘンリー2世の破門を、宣告し始めた¹⁴⁶⁾。

ヘンリー2世にとって、この破門が実際に適応されたならば、一般の俗人となる。従って、イングランド王であり続けるならば、この破門を、ローマ教皇

141) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 290.

142) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, *op. cit.*, p. 21.

143) L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 209.

144) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, p. 792.

145) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, *op. cit.*, p. 21.

アレクサンデル3世によって、撤回してもらわなければならない。

そこで、破門を恐れたヘンリー2世は、クラレンドン法に対して、何某かの譲歩を、しなければならなくなった。

だが、ヘンリー2世は、このクラレンドン法を、多少教会側に変更すると、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに、屈服することになるので、絶対に、クラレンドン法を変更したくない。

逆に、カンタベリー大司教トマス＝ベケットにとっても、クラレンドン法を承認すれば、教会法が、後退することになるので、絶対に、現状のクラレンドン法を、認めることができない。

このような状況を打開するために、1167年10月、ローマ教皇の全権特使が、和解を取り付けに、双方の小競り合いが行われていたノルマンディーにやって来た。

だが、全権特使に対し、自身の立場を説明するためにやって来た、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、クラレンドン法に妥協すること、また自分の立場を修正することに、拒否したため、第1回目の和解は、失敗に終わった¹⁴⁷⁾。

再度、双方の和解のために、1169年1月6日、ローマ教皇が、新しい特使を、双方に送り、モンミラーユ (Montmirail) 会談を設けた。

だが、双方の代表者がこのモンミラーユにおいて会談を行ったが、カンタベリー大司教トマス＝ベケットと、逃亡を共にした友人の聖職者たちさえも、感情を害するような言葉を、控えるよう促したほど、いたずらに荒れた会談になったため、第2回目の和解も、失敗に終わった¹⁴⁸⁾。

1170年6月14日、ヘンリー2世は、長男ヘンリーの戴冠式を、ヨーク大司教ロジャー (Archbishop Roger of York) のもと、ウェストミンスター＝アベイで、挙行了した。この長男ヘンリーは、ヤング＝キング＝ヘンリー (Henry, the

146)・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 211.

・David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, pp. 793-4.

・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 292.

147) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 292.

148)・George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 293.

・A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 212.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

young king, 1155-1183) となり、父ヘンリー2世と、イングランドを共同統治することになった。

ヘンリー2世が、大陸の慣習に従い、生前中に、長男ヘンリーに対し、戴冠式を挙行し、ヤング＝ヘンリーにしたことは、跡目争いを避けることと、妻アリエノール＝ダキテーヌに、唆されたからである¹⁴⁹⁾。

また、この戴冠式を、ヨーク大司教によって行われたということは、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに対する、ヘンリー2世の嫌がらせであった。

イングランドの最重要国事に関して、イングランド国教会のナンバーワンであるカンタベリー大司教トマス＝ベケットを、無視したことにより、ヘンリー2世は、近隣のキリスト教国から、外交的に疎外されることになった。

このような状況下では、ますます和解が遠ざかる一方である。

そこで、フランス王ルイ7世が、両者の和解のため、仲介に入った。

ただし、ルイ7世は、教会側のカンタベリー大司教トマス＝ベケット側を、支持する仲介者であった。

というのは、ルイ7世が、ローマ教皇アレクサンデル3世から、保護を受けており、またルイ7世自身、カンタベリー大司教トマス＝ベケットを、保護していたからである。

ルイ7世の和解努力の結果、1170年7月22日、ヘンリー2世とカンタベリー大司教トマス＝ベケットとは、ヴァンドーム (Vandôme) 北部、フレトヴァル (Fréteval) で、会談を行い、協定に漕ぎつけた¹⁵⁰⁾。

和解ではなく、協定が可能となった要因は、ヘンリー2世が、外交的に孤立し、このことを回避させるために、教会の権利に、多少譲歩したからである。

この1170年7月22日の協定によって、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、イングランドに、6年ぶりに、帰国することになった¹⁵¹⁾。

149) *The Hutchison Illustrated Encyclopedia of British History*, Helicon Publishing Ltd, 1996, p. 168.

150) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 328.

・ A. L. Poole, *The Oxford History of England*, Vol. 3, *op. cit.*, p. 213.

・ George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 293.

イングランドに上陸する前に、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、ローマ教皇アレクサンデル3世から、ヤング＝ヘンリーの戴冠式を挙行した、すべての高位聖職者の職務停止求め、ロンドンとソールズベリーの司教の破門を喚起する書簡を、受け取った¹⁵²⁾。

1170年12月1日、イングランドのケント東部、サンドイッチ (Sandwich) に上陸したカンタベリー大司教トマス＝ベケットは、すぐに自分の定位置であるカンタベリー大聖堂に行った。

そのカンタベリー大聖堂から大司教トマス＝ベケットは、ローマ教皇アレクサンデル3世の書簡とおりに、ヨーク大司教ロジャー、ロンドン司教、ソールズベリー司教、3人を破門した。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットから破門された3人は、すぐに、ヘンリー2世の居るノルマンディー、バイユー (Baieux) に行った¹⁵³⁾。

1170年12月25日、クリスマスの日、バイユーの地で、身分の低い聖職者、トマス＝ベケットが、ミサで自分のことを、蔑むようなことを言っていることと、自分の支持者であり、また高位聖職者でもある3人の破門を知ったことで、ヘンリー2世は、激怒し、協定という概念は全く無くなり、イングランド国内の秩序回復、ひいては経済発展、権力拡大のため、カンタベリー大司教トマス＝ベケットに対する怨念が、湧きあがって来た。

喚起高まったヘンリー2世は、「この気狂い聖職者を、誰か消してくれる者は、いないのか?」と言った¹⁵⁴⁾。

ヘンリー2世の傍にいた4人の騎士レジナルド＝フィツ＝アース (Reginald fitz Urse)、ウィリアム＝ドウ＝トレシー (William “de Traci”)、ヒュー＝オヴ＝モーヴィル (Hugh of Morvill)、リチャード＝ブリト (Richard Brito) が、この言葉とおりに解釈し、カンタベリー大司教トマス＝ベケットを殺すために、

151) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *op. cit.*, p. 294.

152) George Burton Adams, *The Political History of England*, Vol. 2, *ibid.*, p. 294.

153) David Hume, *The History of England*, Vol. 1, *op. cit.*, p. 332.

154) Kenneth O. Morgan, Edited by, *The Oxford Illustrated History of Britain*, *op. cit.*, p.125.

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

1170年12月26日、彼から去り、カンタベリーに向かった¹⁵⁵⁾。

1170年12月29日夕方、カンタベリー大聖堂に到着した4人の刺客は、ほの暗い窪んだところで、お祈りをしている大司教トマス＝ベケットを見つけた。

4人の刺客は、大司教トマス＝ベケットを背後からではなく、正面から、彼の頭を切りつけた。

言い換えると、大司教トマス＝ベケットは、正面から4人の刺客に立ち向かい、抵抗することなく、切りつけられた¹⁵⁶⁾。

この時、カンタベリー大司教トマス＝ベケットは、殺害された。

カンタベリー大司教トマス＝ベケットが殺害された場所は、カンタベリー大聖堂北東の袖廊（シュウロウ）である。

この袖廊は、現在ライトの光でも、ほの暗いが、殺害当時は、ライトもなく、冬の夕方で、トマス＝ベケットが、刺客に返事しなく、変装していたら、身分が分からなかったであろう。

現在、トマス＝ベケットが、殺害されたところに祭壇が設けられており、その床には、いつも小さなロウソクが、灯されている。

V おわりに

ヘンリー2世の王位継承は、多難であった。

また、ヘンリー2世の治世当初、難題が多かった。

これらの難題は、すべて先代の王、ブロアのスティーヴン王に、依るものであった。

ヘンリー2世の祖父、ヘンリー1世の次の法的王位継承者は、ウィリアム＝ジ＝アセリング（William the Aetheling, 1103-1120.11.25）であった。

だが、ウィリアム＝ジ＝アセリングは、新船、ブランシュ＝ネフ（La Blanche Nef：ホワイト＝シップ White Ship）の人為的海難事故によって亡くなってし

155) David C. Douglas and George W. Greenaway edited, *English Historical Documents*, Vol. 2, 1042-1189, *op. cit.*, pp. 809-810.

156) Christopher Harper-Bill, *Saint Thomas Becket*, *op. cit.*, p. 33.

まった。

そこで、王位継承問題が発生した時に、素早く、ヘンリー1世の甥、ブロア伯のエティエンヌ (Étienne de Blois, c. 1096-1154.10.25) がイングランド王位を継承して、ブロアのスティーヴン王になった。

ブロアのスティーヴン王の性格が、柔弱であるが故に、イングランド国内は、無政府状態が続き、王権は、失墜する一方であった。

この無政府状態の時に、教会は力を増し、独自の権力を獲得した。

すなわち、すべての聖職者は、教会の司法で裁かれ、王室裁判所では、裁かれないという特権であった。

ヘンリー2世は、前ルイ7世のお妃であった、アキテーヌの女子相続人アリエノール=ダキテーヌとの結婚により、フランス王より、ヨリ広大な土地を領有することになった。

この広大な領地を、ヨリ安全に、ヨリ平穩に支配するためには、当然、王位の地位にあるイングランドを、秩序だった統治を行わなければならない。

それには、教会の力を借りなければならない。

ヘンリー2世は、教会の力を借り、イングランド国内を平穩無事に統治することにより、結果的に経済を発展させ、ヨーロッパ内の支配権を拡大させようと考えた。

そのためには、教会を掌握し、自分の権力の下に、教会を位置付けなければならない。

そこで、このことに実現のために、ヘンリー2世は、教会権に介入しようとした。

この政策の実現が、ヘンリー2世と、カンタベリー大司教トマス=ベケットとの争いになってしまったのである。

ローマ教皇側から見ると、カンタベリー大司教トマス=ベケットの殺害は、神をも恐れぬ不届き千万な出来事であった。

逆にイングランド王国から見ると、秩序安定、経済発展のためであった。

だが、当時のイングランド国内では、国民の圧倒的大部分が、キリスト教で

2009年12月 川瀬 進：ヘンリー2世とトマス＝ベケット

あったので、このカンタベリー大司教トマス＝ベケットの殺害は、間違えてあった、といえるであろう。

というのは、国民の大部分がキリスト教であるが故に、教会の力を借りなければ、秩序回復が見込めなく、またイングランド王国の経済安定も、見込めないからである。